

# 九州ルーテル学院大学

## Teaching Portfolio

### 2026



所 属： 人文学部人文学科

---

名 前： 栗原 和弘

---

作成日：2026年5月15日

教員氏名：栗原 和弘

所属：人文学部 人文学科 児童教育専攻

## 1. はじめに

昨今、大学の教育については単位の実質化や質の保障と教育成果の公表など、自らの教育に対するさらなる責任や外部にむけての説明が求められている、大学教員の職務には教育、研究、学内業務など様々な役割があるが、かつて大学教員は研究者としての研究業績や論文数で評価されることが多く、教育については講義内容、使用教科書の選定など、教育の裁量のもとで比較的自由に教育が行われてきた。また多くの大学では学生による授業評価を行っているが、授業の内容についての経年的な変化について授業評価だけで検討することは難しくなっている。ティーチング・ポートフォリオを作成することで、教員自らがシラバスや学生からの授業評価に加えて教育に対する取り組みや成果など教育活動全般について網羅的にまとめることができるメリットがある。

以上を踏まえ、九州ルーテル学院大学では2020年度から専任教員においては教員個別のティーチング・ポートフォリオを作成することとする。

## 2. 教育の責任

九州ルーテル学院大学での私の教育責任は、特別支援学校の実務家教員として人文学科特別支援教育専攻における専門科目と共通教育科目を担当することである。また、特別支援教育コース長及び障がい学生サポートセンター長としての職責を担っており、教職を希望する学生や障がい学生の修学支援に積極的かつ親身に取り組む責任がある。

### (1) 授業科目の担当

2025年～2026年度の2年間は以下の表の科目を担当している。

科目名	開講年度時期	履修者数	備考
人間と障害	2025～2026 前期	約190人	オムニバス
肢体不自由教育総論	2025～2026 前期	約45人	
重複障害教育総論（心理等）	2025～2026 後期	約45人	
重複障害教育総論（教育課程等）	2025～2026 後期	約45人	
特別支援学校教育 実習Ⅰ	2025～2026 通年	約45人	オムニバス
特別支援学校教育 実習Ⅱ	2025～2026 通年	約45人	
特別研究	2025～2026 後期	約4人	
卒業研究	2025～2026 通年	約4人	
教師力演習	2025～2026 前期	約70人	オムニバス

### ■ 主要授業科目

#### 「人間と障害」

すべての学生が受講する共通教育科目である。

この授業を通して、①「障害」と共に生きる個人と家族、②「障害」のある子どもと共に生きる教師、

③「障害」と時代、社会、文化の関係、④「障害」のある子どもの出生・出産とその保護者の心理という四つの視点から取り上げ、受講生とともに考察することを目的とした総合科目である。

### 「肢体不自由教育総論」

特別支援学校教員免許状(知・肢・病)を取得する3年生が履修する基礎的科目である。

授業では、特別支援学校教育要領・学習指導要領を基準として特別支援学校(肢体不自由)において編成される教育課程について、その意義や編成の方法及びカリキュラム・マネジメントについて学修する。また、肢体不自由のある幼児児童生徒の障害の状態や特性及び心身の発達の段階等を踏まえた各教科の指導における配慮事項を学修し、具体的な授業場面を想定した授業設計を行う方法についても学修する。

### 「重複障害教育総論(心理等)」

特別支援学校教員免許状(知・肢・病)を取得する3年生が履修する科目であり、「重複障害教育総論(教育課程等)」と連続履修する科目である。

授業では、重複障害のある幼児児童生徒に対する教育の目標・方法・内容について学修する。

特に、重複障害のある幼児児童生徒の特性を、心理・生理・病理に関する基礎的な知識を理解するとともに、教育現場で求められる基本的な対応の要点について学修する。併せて「障がい」(障がい状況)の捉え方と関わりの在り方の基本となる障がい者観についても考察する。

### 「重複障害教育総論(教育課程等)」

特別支援学校教員免許状(知・肢・病)を取得する3年生が履修する科目であり、「重複障害教育総論(心理等)」と連続履修する科目である。

授業では、特別支援学校教育要領・学習指導要領を基準として、特別支援学校において幼児児童生徒の重複障害の状態や特性及び心身の発達の段階等に即して編成される教育課程について、その意義や編成の方法及びカリキュラム・マネジメントについて学修する。

### 「特別支援学級教育実習Ⅰ」

特別支援学校教員免許状(知・肢・病)を取得する3・4年生が履修する科目である。

3年後期は、特別支援学校における教育実習の事前指導として、授業や学校行事への参加等を通して教育観について学修し、学習指導要領や学級経営についての復習、学習指導案の作成ならびに模擬授業などをグループワークを中心に実施する。

4年前期は、「特別支援学校教育実習Ⅱ」の事後指導として、全員が実習報告を行い、成果と反省点を明らかにし、実習で残された課題についても検討を加える。

### 「特別支援学校教育実習Ⅱ」

特別支援学校教員免許状(知・肢・病)を取得する4年生が履修する科目である。

特別支援学校での2週間の実習をとおして、これまでに各自が得てきた特別支援教育に関する知見や適切な指導及び必要な支援のあり方について再度、学修し、教師としての職命、授業の進め方、学級経営等についての体得を目指す。

## (2) 教育組織運営

2026年度は特別支援教育コース長、障がい学生サポートセンター長、学生支援委員、教職支援委員、クラスアドバイザー、自閉症支援部顧問を務めている。特別支援教育コース長として、1年生の共通教育選択である「人間と障害」の主査として授業を担当するとともに、関係教員との連絡調整等を行いながら、受講学生の障害に対する見方について考察し、新しい人間観の構築を目指している。また、近年取得希望者が増加している特別支援学校教員免許状の取得を目指す学生へに対する全体的な指導や3・4年生が履修する特別支援学校教育実習Ⅰ・Ⅱの主査として全体掌握や実習依頼等の業務を行っている。

また、本学は、障がい学生の円滑な修学に寄与するため、全学的な支援体制を構築している。私は、その中核となる障がい学生サポートセンター長として、障がい学生サポートセンター職員への助言、障がい学生15人(2026年度)に提供する合理的配慮等についての検討等、障がい学生をサポートする学生サポーター「サポーターSHIP-S」の活動への助言、教職員の理解を深めるための研修会の企画等を担っている。特に、「サポーターSHIP-S」は2025年度PEPNet-Japan(日本聴覚障害学生高等教育支援ネットワーク)が主催するシンポジウムの実践事例コンテストにおいて「ベストプラクティス賞」を受賞した。併せて、熊本市内6大学の障がい学生支援部署で毎月行っている情報交換会である「SUN-Kuma 会議」に出席し、他大学との連携を図りながら、より良い支援の在り方を検討している。

加えて、教職支援委員として、教職を目指す学生に対して、教職に求められる資質・能力や心構え等についての指導を行うとともに、教員採用試験対策講座の主査を務めており、毎年特別支援学校教諭を輩出している。

さらに、人文学科児童教育専攻3年のクラスアドバイザーとして学生の心に寄り添い、履修指導及び進路指導等を行っている。これらの職務に加えて、文化系サークル活動である自閉閉症支援部(毎週土曜日及び各イベント活動)の顧問として、自閉スペクトラム症の子ども(就学前～高校生)に対する療育活動を指導支援している。この療育活動は、29年間という長きにわたって継続されている取り組みであり、本年度も活動にあたっては、単に場当たりに学生がボランティアを展開するのではなく、私が指導スタッフ(本学名誉教授・元職員・OB 保護者)とともに指導にあたるとともに、熊本県自閉スペクトラム症協会と連携した取り組みも行っている。また、子どもに対する支援活動と併行して、保護者のピアカウンセリングや情報交換の支援を行っている。このことは、子育てに対する悩みや不安を解消する場となっているとともに、子育てから解放されたひとときを過ごすことによって保護者の心理的安定にも寄与するなど、保護者自身の支援機能も有している。

## 3. 教育の理念

開学以来本学では、少人数教育による手厚い指導と机上での学修だけではなく様々な体験学習を通して身に付けた幅広い視野や知識を卒業後に社会の様々な場面で生かせるような教育を目指してきた。それぞれの学科、専攻コースではさらに専門的な知識を身に付けることを目指すが、教育の根幹には他者に感謝し、他者に奉仕する「感恩奉仕」の精神を自ら実践できる人材を育成する教育を4年間で行うことが本学の教育理念であると考えます。

### (1) 理念Ⅰ 学生の寛容な心を育てる

私たちが暮らす社会は、障がいのある方をはじめ、多様性に溢れる人たちで構成されており、我が国は共生社会を目指している。本学の学生は社会の形成者であるとともに、卒業後に教職や対人援助職を目指す学生が多いことから、授業やボランティア活動等の体験学修をとおして、障がいをはじめ、様々な状況にある人たちのことを理解し、認め合い、相互に尊重する寛容な心を育てたい。

## (2) 理念2 子どもから学ぶ

私自身、本学に就任するまでの36年間、特別支援学校の教員として、障がいのある様々な子どもたちや保護者の方々に会い、多くのことを学んできた。また、これらの方々との出会いは自らの学びを深める契機ともなった。教員は社会や子どもたちの変化に合わせて学び続けることが求められる職業である。そこで、授業では出会った子どもたちや保護者の方々とのエピソードを紹介し、子どもから学ぶ重要性を伝えていきたい。

## (3) 理念3 座学の学びを実践へ

特別支援教育において、個に応じた適切な指導及び必要な支援が肝要である。それらに関する知識・技能については大学の授業（いわゆる座学）で学び、基礎的・基本的知識及び技能を身につけ、それらの知識・技能を踏まえたうえで、一人ひとりの幼児児童生徒の特別な教育的ニーズに接する中で、最適な指導・支援を考え、試み、振り返ることにより、体験知となる。

これらの知識・技能と体験知との融合は、教師としての指導力を高めることにつながる。

よって、学生には授業における基礎的・基本的な知識・技能の習得に併せて、KLC 子どもサポーターに参加するなどして、身につけた知識・技能を発揮し、体験知を高めて欲しいと考えている。また、KLC 子どもサポーターとして授業に入ることにより、学生は教員の日々の授業に対する思いをはじめ、自立活動の指導、学級経営、生徒指導及び進路指導など様々な教員として身につける必要がある資質・能力を目の当たりにし、大学における学修に対するモチベーションを高めることができると期待している。

## 4. 教育の方法

教育理念との関係では以下の点を重視した教育方法を取っている。

### (1) 自らの意識を振り返る機会を設ける

障がいをはじめ、様々な状況にある人たちのことを理解し、認め合い、相互に尊重する寛容な心を育てるためには、授業において、様々な障がいについて深く学び、理解することが重要である。そのためにも、障がいのある子どもたちの心理・生理・病理、教育の歴史及び教育関係法規等について丁寧に指導している。それらを踏まえて、一人一人の学生が自らの障がい者観と対峙する機会を授業中に設け、深く考えることで寛容な心を育てたい。

### (2) 学校現場の事例を紹介する

障がいのある児童生徒の実態は多様であり、彼らの教育的ニーズに応えるためには、座学をとおして多くの知見を得るとともに、実際の教育現場における実践を数知り、子どもから学ぶ姿勢を持ち続ける必要がある。そこには多くの工夫を生み出すヒントがある。そこで、授業では学校現場の事例を数多く紹介するとともに、当事者、保護者及び特別支援学校教員をゲストティーチャーとして迎える

などの授業に取り組んでいる。あわせて、障がいのある人たちと関わった経験がない学生もいることから、理解を深めるための動画・画像等を活用した講義を行っている。

## 5. 教育改善のための努力

### (1) 改善努力1 授業評価アンケートと授業改善報告書

各学期終わりに実施される学生による授業評価アンケート結果の数値評価と自由記述のコメントのうち、改善すべき点は真摯に学生の声に耳を傾けるようにしている。学生からは、グループワークや深く考察する時間の確保についての評価が低かったため、授業を計画する段階で時間配分を見直した。また、過半数の学生が事前・事後学修に取り組んでいるものの、事前・事後学修に主体的に取り組む学生の数は多くはない。そこで、課題作成において取り組むべき課題を明確にするとともに、自ら調べるヒントを示すことなど改善に努めている。このように、改善すべきと思われることは授業改善報告書に記載し、翌年度に改善するようにしている。

### (2) 改善努力2 セミナーや学会等への参加での情報収集

充実した授業を行うためには、所属する特殊教育学会や関連する学会に参加し、他大学の実践的研究の事例発表や新しい研究成果などを参考に、自らの授業に取り入れる必要がある。また、2019年度から県内特別支援学校の教員らと立ち上げた「熊本自立活動研究会」において得た、特別支援学校や特別支援学級での実践的取り組みを積極的に授業で紹介している。

## 6. 教育の成果・評価

学生の授業評価アンケートによれば、「各授業の到達目標に達成したか否か」についての評価は4.3~4.7(5段階評価)と平均よりも高く、教育の成果があったと考えられる。また、2026年度公立学校教員採用選考考査(熊本県・熊本市・福岡県)の特別支援学校(学級)教諭等において、1人中全員が合格したことは一定の成果と考える。

## 7. 今後の教育に関する課題と目標

本学の教員となって、2026年度で7年目を迎えた。授業評価アンケートなどに表れる学生の声に真摯に向き合い、幅広い視野で障がいのある子どもや人と寛容な心で関わることのできる人材を育成するために、今後もより良い授業の創造に向けて研鑽に努めたい。

### 【根拠資料】

- ・シラバス
- ・大学ホームページ